

〈特別寄稿〉

心の裏と表

—ホンネとタテマエのメカニズム—

氏原 寛

帝塚山学院大学教授

1. ウソがマコトか、マコトがウソか

(1) ゴッドファーザー

「ゴッドファーザー」というのは皆さんご存知でしょう、映画がありましたね。ご覧になった方もおられるかも知れませんが、ギャングの親分が、相手のギャングに対しては残酷無類なんですよね。だけど家族に対してはすごく優しい、温かい。だからあのギャングは本当は心根の優しい男なのか、あるいはもともと酷薄無残な大変な男なのか、というのを考えるとなかなか難しい。あなた方もある人に対しては優しいけれども、ある人に対してはひどく冷たい、ということがあるでしょう。そういう場合自分は本当のところは優しいのか、あるいは冷たいのかということですね。皆さん多かれ少なかれ恋愛体験があると思いますが、恋人に対しては優しい気持ちがふつふつと湧いてくるけれど、他の人に対しては冷たいなんて人いるでしょう。私は昔感激しました。前に名古屋のある大学にいたのですが、そのときに女子学生が「彼氏ができてね、私の中に優しさがあることに気がついてびっくりした」ということを言いましたね。やっぱりいいものですね、人を好きになると。優しさがあることに気がついた。今までは冷たかったんですよ、親に対しても友達に対しても。だけど彼氏ができると、彼氏にだけは優しい気持ちが出てくる。難しいですね、どっちかということです。今日はそういう話をしようと思って来ました。

(2) 誕生日のビール

次は、「誕生日のビール」です。ある若い30代くらいの父親に、幼稚園くらいか小学校低学年くらいの子ども2人が誕生日にビールをプレゼントしてくれたんです、一本。それでこの若い父親は感激しまして、「こんな旨いビールは飲んだことない」と言って飲んだという話です。父親には、よくぞここまで育てくれた、という気持ちがあるんですね。僕等は、「今ここを充実させなけ

ればいけない」と普段から言っているでしょう。だけど今がいつか、ここがどこかというのは非常に大事ですね。たとえば私は今ここで懐かしい市大へ来てしゃべっていますね。今ここで物理的には、私はあなた方と今ここを共有している。だけど私は残念ながら75歳、もうすぐ76歳。あと持ち時間がね、平均寿命でいけば5年、しぶとくがんばって10年だ。あなた方はまだ持ち時間が60年くらいあるでしょう。あと60年くらい持ち時間ある人と、あとせいぜい10年くらいしかない私とでは、今ここはまさに今ここにしか過ぎないけれど、私にとっての今は大事ですよ。あなた方が2,3年青年海外協力隊で外国へ行く。一見無駄に過ごしても、構わない。帰ってこれますからね。私だったらアフリカあたりに行ったら帰れるかどうか問題ですね。だいたいもう着くまでもつかどうか危ない。だから、今ここは物理的空間的には同じです。物理的には今ここを共有している。けれども私にとっての今ここは、あなた方のものとは全然違います。私にはここに来るまでに75年間の歴史がある。そういう重みがある。あなた方にそれがあるかどうか。あなた方はこれからつくっていくですけれどね。

だから、子どもが誕生日にビールをプレゼントしてくれたと。こんな旨いビール、飲んだことないと。もちろん、さらに歴史をさかのぼれば、皆そうだけど子どもは可愛いときもあれば可愛くないときもあるわけです。なんでこんな子を産んだんだろうとか、この子達の面倒をこれからもずっとみていかなあかんのかとか思って、がっかりするときもいっぱいあるわけですよ。しかしもう可愛くてたまらなときもある。いろんなことがあって、ここまで来ている。もっと言えばこういう子どもが産まれるについては、奥さんとの馴れ初めとか、いろいろな因縁があるでしょう。さらに言えば、今から10年経ったら、子どもたちはどうなっているか。あるいは、その時自分は、われわれはどうなっているかと思っているわけです。こういう思いがこもって、「こんな旨いビールは飲んだ

ことない」となるわけです。そのビールは普通の麒麟ビールですよ。普段飲んでいるやつと変わらない。だから嘘ですよ。だけどね、そのときに子どもに対して、「これはいつものビールとっしょやないか」と言ってスパッと飲んでしまって終わりとなると、子どもはそれはがっかりしますよ。父親は、「子どもが目を輝かせて見てくれていた」と言って、もう感激していましたね。こういう場合、「その辺りに売っているビールと同じではないか」と、ビールの製造工程を縷々説明してですね、「あらゆるビールは均質なんだ」と。もし違ったビールができていれば、「それは製造過程のどこかに間違いがあったんだ」と言ったら、いっぺんにしらける、ということがあるんです。

だからこの場での真実というのは、やっぱりこの父親にとっては自分の過去なり、あるいは未来なりというものを見通した今です。つまり今がいつかということです。あるいはここがどこかということです。その思いがこもって、「こんな旨いビールは飲んだことない」と。今この瞬間は一瞬です。やっぱりこの場合、「こんな旨いビールは飲んだことない」というのは本当なんです。だけどそれが本当であるという場合には、同じ麒麟ビールである、普段と変わらない、という立場から見れば、これは嘘です。同じビールではないか、ということになります。その次元だけでその場の意味を、状況を意味づけてしまえば、皆しらけるんです。私たちのつながり、このごろ人間同士のつながりがえらく疎くなっていると言われるのはね、そういうことです。つまり客観的に正しいことを超えたレベルで、言ってみれば主観的なことです。この若いお父さんにとっては、「こんな旨いビール初めてだ」というのは、独りよがりです。他の人が飲んだら、「いつものビールと変わらないじゃないか」となります。「ちょっと冷えとらん」「冷え方が足りん」などと文句を言うかも知れん。それは何て言ったらいいんだらう。主観的真実とでも言うべきか、その真実を強調すれば、客観的真実を超えてしまう。しかし客観的レベルからすれば、それは嘘です。そんな美味しいビールはありえない。普通の麒麟ビールです。その辺を考える必要がある。ところがこの頃のわれわれは客観性ばかりが真実だと思込んでいる。オーバーに言えば、よく言われるこのごろの“疎外現象”、“しらけ”、“何のために生きているのか”、そういうものは、客観性の強調ということから言えます。

(3) ポトマックの墜落事故

ポトマックの墜落事故というのは、大分前のことです。

ポトマックというのはアメリカの首都ワシントンにある川です。日本から桜が贈られて桜並木がきれいだと、有名ですね。戦争中にアメリカ人が切ってしまったんですけど、今また生えて咲いているようです。そのポトマックにかなり大型の旅客機が墜落しました。空を飛んでいるときに既におかしくなって、空港までいけない、だからそこいらに不時着するというので、救援活動も行われます。救急隊や消防隊が下で待っているわけです。それがどういことになったのか、ポトマック川に突っ込みました。突っ込んで結局乗客は脱出するわけです。脱出するわけだけでも、冬なので川には氷が張っていました。そこへ脱出するわけです、飛び込むわけです。当然寒いです。だからかなりの人が亡くなったのかな、もちろん助かった方もおられます。そこで、ある中年のおじさんが飛び込んで脱出しました。浮き輪を投げてもらって助けてもらうのを待っていたわけです。ところが目の前で若い女性が浮き輪なしでもがいていました。それでこのおじさんは、自分の浮き輪をその女性に譲ったんです。その女性は浮き輪にすがって、引き上げられ助かったんです。そのおじさんは次の浮き輪を待っていたんだけど、川は何しろ冷たい。だから泳ぎはいくら上手であっても麻痺するんでしょうね。それでこのおじさんは亡くなったんです。これが全米に報道されまして、もちろん日本にも報道されました。ということは美談ですね。私もこの報道を見て、なかなか大した人がいるなと感心しました。

私は臨床心理が専門ですから、ついそういうことを思うんですが、ふとこのおじさんには扶養家族はいなかったのかと思いました。もちろん日本人の考える扶養家族の感覚はアメリカ人にはないようです。そこは少し違うけれども、私は日本人として思いました。彼は泳ぎにも自信があって、この冷たさだけれども自分も助かるつもりで若い女性に浮き輪を譲りました。せっかく浮き輪を確保しているのだから、それにすがっておれば助かったのに、やはり危険ですね。もしも家族のことを思えば、人の浮き輪を奪ってでも生き残ることを図るべきか、図るべきじゃないかということです。よくわからない。日本で言えば、やはり男が一応、このごろは役割分業なんて説はやりませんが、やはり現状では男が稼がないといけない。するとこのおじさんは中年ですからそこそこのポスト、収入もそこそこあったかもしれない。この人が死ねば、収入源がなくなるわけです。これまで奥さんは専業主婦で高級住宅地か中級住宅地か、わりあい優雅に暮らしていた。それができなくなって、働かなければならない。あるいは子どもも私立の学校へ行っていた。

居住区域も比較的文化的な雰囲気漂っているところに住んでいた。それが全部駄目になって、下町のちょっとぼろいアパートに移らないといけないかもしれない。子どもも学校をやめなければならぬかもしれない。大学生くらいの子どもがいれば、働かなくてはならなくなる。私たちとは感覚がずいぶん違うということがあっても、です。要するに自分が死ねば、家族の生活は激変します。激変というのは大体においてはネガティブな方向にいくでしょう。それを思えばなかなか死ねない。つまり家族に対する責任ということと思えば、なかなか死ねないんじゃないか。人の浮き輪を奪ってということになるとまずいかもしれませんが、幸いに自分が浮き輪を確保しているのだから、そのまま待っていたら5分か10分して引き上げてもらえる。それくらいの判断力はあったのに、ぱっと譲って自分は死んだ。これはひょっとしたらまずいんじゃないかということです。家族に対する責任感を瞬間忘れて、ヒューマニズムか、人類愛か、人に浮き輪を譲りました。そのために家族はその後、かなりの不幸というか、試練というか、厳しい状況にさらされます。これは美談というふうには、単純には言い切れないんじゃないかと、ふと思いました。とっさにそんなことをするというのは、まだまだ人間捨てたものじゃないかも知れないとは言えますけれどね。難しいですね。

神戸の震災のときに、避難所で本当に同士の愛的な感情が盛り上がったらしいですね。つまり余震がまだあって、体育館のようなところに避難なさってるんだけど、それが崩れたら皆死ぬんです。だからまさに「今ここ」なんです。つまり明日どうするか、ではなくて今ここをどうしのぐかなんです。余震で天井が崩れたりしたら皆死ぬんです。金持ちも貧乏人も男も女も大人も子どもも関係ない。だからそういう一種の同士の愛、一体感みたいなものが広がってきました。被災者の方が、「人間まんざら捨てたものでもない。やはりお互いの肌のぬくもり、助け合う、皆でしっかりがんばろう、という一種の同士の愛的なつながりが盛り上がった。震災は不幸なことだったけれども、あの体験、日本人はまだまだ捨てたものじゃないということを感じられたのは、非常に良かった」と新聞に書いておられました。ところが、自衛隊が風呂をつくりました。それで「生き返った」と被災者が入っておられた。あのころから、皆明日のことを考えだしました。つまり余震はまずない、だから死ぬ心配がなくなりました。そうしたら明日からどうしようか、となります。そうすると金持ちはどンドン、言葉は悪いけれども避難所を脱出していくわけです。近くの高いマンションを借りるとか、あるいは親戚にかなり有力な者がい

るとかです。そうするとまた冷たさが戻ります。

そのころの新聞に「若者は、もはや席を譲らなくなった」という見出しが出ました。ボランティアに行った若者たちが、電車で女性や老人に席を譲ったんです。ところが脱出する人が出てくる。そうすると、皆自分のことが大切になるわけです。同士の愛的な、今までの一体感が崩れて、貧乏人は貧乏人、金持ちは金持ち、人のこと構ってられるか、ということです。だから初めはボランティアに行った人は、避難所の人たちのそういう同士の愛的な気持ちに巻き込まれて、人間みな兄弟、1人はみんなのために、みんなは1人のためにということが、スローガンじゃなくて実感として感じられた。そうすると優しさが出てくる。自分より弱い人を、自分に少しでも力があれば、サービスしたい。若者たちは席を譲るようになりました。それが、一週間かくらい経ってから、避難所の人たちが同士の愛的な結合感を、一体感を失いかけるとともに、譲らなくなりました。だからボランティアというのはなかなか微妙ですね。ボランティアというのは、自分の善意を提供する仕事なんです。私たちは、善意というものをかなりの時間恒久的に、恒常的に持ち続けるというのはまずできない。善意で行くから、善意の勝負です。いくなれば、善意が続かなくなれば、ボランティアというのはいつでも帰れるわけです。善意と善意のそこだけを見たら、まさに善意の塊、非常に良いわけです。だけどそれが切れてきたときにどうするかということ、相当考えなければいけません。

(4) カルネアデスの板

松本清張という推理作家が同じ題で短編を書いています。カルネアデスというのは、ギリシャ人の法律家らしいです。この人がある一つの法律的な命題とでも言うような問題を提起しています。それが「カルネアデスの板」として知られていることだそうです。どういう話かといいますと、昔ギリシャで、若者が2人で船に乗ったんです。その船というのが、客船でして何人か乗っていたんでしょうね。その船に乗ってどこかに行こうとしたんでしょう。ところが嵐にあいまして遭難したんです。船が沈みました。沈んだんですけれども、この若者は何とか一生懸命もがいてると、浮いて海面に出たんです。彼は海面に出てちょっと浮くくらいはできました。たとえば50メートルくらいなら泳ぐことはできるけれども、それ以上はとてできません。だからいつまでもというのはできない。それで「やっぱりだめか」と思っていたんだけどそのとき、目の前に板が一枚浮いてきたんです。何か船のどこかが壊れてはがれて浮いたんで

しょう。目の前に浮いてきたわけだから、ちょっと泳いでその板にすがりつきました。それで「助かった」と思うわけです。エーゲ海というのは瀬戸内海とよく似てるから島が見えます。島まで泳いでいったら何とかなるだろうと。それで安心して板にすがりついていたら、もう1人浮いてきました。それが一緒に乗っていた親友でした。その彼にとっては、ぱっと浮いてきたら、目の前に親友が板にすがりついているのんびりした顔で浮いているわけです。彼も「助かった」と思って板にしがみつきました。そしたらこの板が沈み始めました。1人を支えるだけの浮力はあるんです。ところが2人しがみつくと沈みます。それでこの板には2人はしがみつけない。そこでどうするかという問題です。

親友がぱっと浮いてくる。彼もちょっとは浮いている力はあるけれども、とても島まで泳ぎきる力はないのは同じです。だから板にしがみつかないと助からない。どうしますか？自分のお母さんが浮いてきたら、どうしますか？「お母さん、もう十分に生きてやる？」とか言って「ここは私に譲って」と言うか。それとも母の恩は海よりも深く山よりも高いから、「お母さん達者でな」と言って自分が沈むか。縁あって親子に生まれたんだから、生きるも死ぬも一緒に2人でしがみついて一緒に死ぬか。これももったいないですね、1人助かるんですから。友だちの場合はどうしますか。「これは私が先に見つけた板だ、なんだお前」とか言って指をひっぺがして突き落とすか。突き落としてもいいけど、突き落とされたその親友、友人は沈むときに「親友だと思ってたのに」とか何とか言って、白目かっとむくかもしれない。これは一生出てきますよ。かといって「達者に」と言って自分が放してみても放して5秒くらいしたら後悔するかもしれませんね。「しまった、やっぱり生きるべきだった」とかですね。「恋人がいたんだ」とかね、「年取った親をやっぱり何とか支えなければならぬ」とかね。いろいろあります。これは答えはないけれど、要するに、私たちにはそういうことがしょっちゅうあるんです。

あなた方でも、たまたま高校時代の友人に出会ってお茶でも飲もうかと喫茶店行ってコーヒーを飲む。そのとき思いませんか？僕は思いますよ。「これどっちが払うんやろう。できればこいつに払わせたい。こうさりげなく、スマートに」とね。難しいよこれは。どっちも思っている。「お前の得は俺の損、俺の得はお前の損」、そういう状況はいっぱいあります。カルネアデスの場合は命がかかっている。命がかかっているからこの場合はシビアです。私はさっき「一人はみんなのためにみんなは1人のために」と言ったけれど、そういう理想的な状況な

んてあまりないんです。ほとんどの状況が、「お前の得は俺の損、俺の得はお前の損」です。私なんかは兄弟6人いましたから、子どものときに例えばカステラや羊かんを切ろうものなら、兄弟皆ぎらぎらした目で見ていました。一番分厚いやつを取らないといけないと。だからね、僕らはその辺に気が付いてないといけない。つまり自分のことばかり考えるのは浅ましいとか。浅ましいけれど、僕らには自己保存の本能というのがあるんです、自分がいかに生き延びるかということですね。そんな話たくさんあるでしょう。イギリスの話で、南太平洋で遭難した船で、これも裁判になったらしいのですが、食べるものがなくなったので誰か1人を食べようとなって、くじ引きして1人殺されたんです。あるいは南米の白い何かとかというドキュメンタリーがあったでしょう。飛行機が南米の雪山に遭難して、食べ物が無くなって、それは亡くなった人がいたのか、とにかく人肉を食べます。それも殺人が伴っている場合があるわけです。だから人間というのはなかなか大変です。

1はそれで終わっておきます。結論はないんです。両方ある、どうしようということ。両方あって、それをどうバランスをとっていかんかということが、やはりそれなりに生きていくための一つの手立てかもしれないのです。さっきの客観性か主観性かという問題もそうですし、こういう二律背反とか、あちら立てればこちらが立たずとかそういう状況にずっとさらされ続けて、きつとわれわれは一生終わるんですね。『愛はなぜ終わるのか』という一時ベストセラーになった本があります。アメリカの人類学者が書いた本です。3年、どんなに大恋愛をしたとしても3年経ったら愛は冷める。それを生物学的に論証していました。だから3年経って愛が冷めてからが結婚生活の勝負所なんです。ところがたいていの人は、騙されたとかね、相手を責めて、それでまた次、それでまた3年。アメリカ人がこりもせずそれをやっているわけです。

2. やさしさときびしさ

(1) ライオンとシマウマ

ローレンツはノーベル賞をもらったオーストリアの生物学者です。この人がたくさん動物の本を書いています。犬好きの人は、『人犬に会う』という本がありますが、これは絶対読むべきです、面白い。『ソロモンの指輪』という世界的なベストセラーがある。それから、『攻撃』という本もあります。これもまた面白い。アフリカの話、僕の記憶ではシマウマとなっていますが、ちょっと記憶が怪しい。アフリカのある場所には、数は忘れられたの

で例えとして聞いてください、たとえば500頭のシマウマがいる、それから50頭のライオンがいる、というところがあります。シマウマは草を食べており、ライオンはシマウマを食べている。だからライオンはシマウマの天敵です。ところがライオンがシマウマを食べすぎると、シマウマの数が減ります。ライオンもシマウマを食べているとは言っても、元気な若いシマウマは食べられない。シマウマは群れをなしていますから、少数のライオンががんばっても、若い元気なシマウマはなかなか獲れない。そこで子どもとか年取ったシマウマ、こういう弱いものを獲るわけです。それをどんどん獲っていくと、シマウマの数が減ります。ライオンの数は増えます。それですますシマウマの数は減ります。ところが、あるところまでいくと、シマウマの数が減って獲れなくなるんです。すると獲れなくなるものだからライオンの数が減ります。ライオンは餌がなくなる。するとシマウマが増えるわけです。シマウマが増えると餌が獲りやすくなる、するとライオンが増えます。ライオンが増えると、シマウマの数が減る。シマウマの数が減ると、ライオンの数も減る。ライオンが減ると、シマウマが増える。シマウマが増えると餌が獲りやすくなって、ライオンも増える。シーソーゲームです。だから、これはでたらめの数ですけども、最大限シマウマは400頭くらいまで減る。するとライオンは80頭くらいまで増える。それがある種のピークで、そこからまたライオンが減りだして、40、あるいは35頭くらいまで減る。シマウマは700か800くらいまで増える。繰り返しているから、その地域におけるシマウマとライオンの数は、シマウマはだいたい500、ライオンは50を行ったり来たりしている。これが生態系とかいう微妙なバランスです。

そこで人間が、ライオンに食べられるシマウマがかわいそう、見てられないと、ライオンを駆除する。それをしますと、シマウマは増えに増えるそうです。そして1000頭にも2000頭にもなって、草を食い尽くして、結局全員死にます。理論的には、天敵のライオンがまびきをしなかったら、シマウマは増えに増えて、結果的に全員死ぬ。実際は移動するからそうはならないらしいですがね。だから、ライオンというのは一見天敵に見えるけれども、実は救世主で、シマウマはそれのおかげで、平和とはいえないけれども、そこで500頭暮らせる。私は動物のテレビが好きだから、アフリカとかでできたらいつも見ているんですが、ときどきチーターやなんか鹿か牛が追われて逃げて、最後に食べられるところを見ると、何とも言えないけれどもね。私たちは残酷だと思って見ているけれども、彼らは飯を食っているわけです。だか

ら苦しめるのが楽しいから苦しめて、はらわた裂いて、さらに血まみれの口でむさぼり食う、それが面白いわけではない。彼らは、私たちがビフテキとかを目の前にして、にこにこしながら「旨いなあ」とか「このレバーは何とか」と言っているのと同じなんです。それを勝手にこっちが残酷だと言っているだけでね。だから、ライオンは残酷だと私たちは思いたいけれども、長い目でみたら救世主なんです。優しいんですね、優しいとは言えないけれども。そんなこと、いっぱいあるですよ。

ローレンツの同じ本にね、草のことが書いてありました。人の通る道にね、そこだけに生えている草か、灌木があるらしいです。それはいつも踏まれているから、見るからにいじけたような草か何からしい。それを、かわいそうだからと道ではない野原や何かに植え替えてやる。そうすると、この草は他の草との競争に負けていっぺんに枯れるらしいです。だから、他の草が生えない、獣道、人や獣が踏んで通る道にしか生えられないんですね。そこにいると、他の草は踏み潰されて生えないから、そこでいわば安定しているわけです。それを人間がかわいそうだからというんでね、やさしい、他の草が成長できるところに移し植えると、枯れてしまう。そういうことがあるんですよ。だから私たちはそういうことをいっばいやっているんじゃないかねえ。それぞれの生き物、植物も含めて、それなりの棲みか、それぞれが自分の適した場所を見つけて、他のものから見たら「そんなところによく住んでいるな」と思うけれども、彼らはそこに住むのが一番いいわけで。例えば秋吉台とかの池や沼にね、生物がいるわけだけれども、真っ暗でしょう。人間は電気なんかつけて観光に利用しているけれども、人間が入れない場所はいっぱいあるようです。そこにいろいろ生物がいる。目が見えないから、目なんかいらなくてすから。「かわいそうや」と言って明るいところにもってきたら、それらは生きる場所がない。だからそこら辺りは考える必要があります。

優しさというのがヒューマニズムで、優しくさえてやればいいと。だから、子どもなんかでも厳しさはやっぱりいるかもしれませんね。このごろ虐待とかいろいろ言われているから、何とも言えないけれども。ペルシャの戦士の家に生まれた子どもなんて、訓練がむちゃくちゃだったらしいです。スパルタ教育というのを聞いているでしょう。スパルタの市民は4万人くらいです。それに奴隷が40万人くらいいる。奴隷を支配してやっていかなければならない。奴隷が団結して反乱でも起こしたら、ひとたまりもないわけですね。だからスパルタ人は、特に指導者になるような人には徹底的な教育をするわけで

す。本当かどうかはわかりませんが、赤ん坊を崖から落として死ぬ赤ん坊は駄目だとか、スパルタ人になる資格がないとかですね。それはちょっと言い過ぎだと思いませんけれどね。優しさというのは、いいかげんに考えるといかんです。私はカウンセラーですから、カウンセラーはどちらかという優しいことばかり言っているように思われていますが、厳しい。生きるというのは、厳しい。生きることの厳しさというのを何とか納得したときに、人間というのは成長するのではないかな。

「アダルトチルドレン」、簡単に言えば親に虐待されたような子どもたちですね。斉藤学という人は、アメリカ婦人の精神科医ですけれども、この人たちをどのように立ち直らせるか、ということで一生懸命いろんなことをやります。「あなたは悪くないんだ、親が悪いんだ」「先生が悪いんだ」あるいは「社会が悪いんだ」ということを言うわけです。だいたい子どもは多かれ少なかれ罪悪感を感じています。自分がちゃんとやらないから、皆が厳しい。自分がだめなんだと思っていじけている。そういう子どもたち、大人も含めて、「あんたは決して悪くない」というようなことを言うんです。それでかなりの効果を挙げています。ベストセラーをいっぱい書いて有名な人です。それに対して、下坂幸三という、摂食障害の治療の大家、この人も精神科医です。この人が、「精神療法」という市販の雑誌、専門家も読んでいる、かなりレベルの高いものですが、そこに名指して「斉藤さんのやり方はある程度はわからないでもないけれども、人間というのは、生きていたらある程度苦勞を避けることができず。そういう苦勞を克服することを通して、人間は成長するのではないか。」とされています。

子どもの場合にも、全て周りが悪いんだとすると、すべてを周りのせいにして、俺がこうなったのはお前が悪いと。家庭内暴力の子どもが、「子どもが親を殴らないといけないうのがどれだけ大変なことか、お前ら分かっているのか」と。お前らというのは親ですよ、親をつかまえて言うんです。「こんな大変なことをやらざるを得ないように育てたのはお前らだ。」と言って、殴っている。だから、こっちの言うべきことは全部知っているんです。子どもが大恩ある親に手をかけなければならぬ、これはけしからんことだ。このけしからんことをやらざるを得ないように育てたのは親だ。だから親に仕返しせねばならない、なんてことを言う子どもが増えていくわけです。罪悪感のかたまりのような子どもには、「完璧な親などいない、あなたは自分が思っているほど悪くはないんだ」と言うことはある意味では効果はあるんです。しかしその結果、何でも周りが悪いとなる。私

が昔会った高校生はね、中曽根が悪いって言いましたね。「中曽根が悪いから学校に行けない」と。自分がやらなければならないこと、それが彼らにはない。「全部周りがしてくれる。全部周りがしてくれて、自分がちょっとでも辛い思いをするのは、周りの誰かがさぼっているからだ。それを糾弾すべきだ」というようなことを言う。こういう子どもは助かりません。どんなことがあっても不幸です。下坂さんはそのように批判したわけです。私はそれを読んで我が意を得たと感じたんですけどね。

皆さんフランクフルって知っていますか。『夜と霧』を書いた人ですね。アウシュビッツに放り込まれて、生き延びて帰ってきた人です。相当したたかな、精神科医です。この本は名著です。ナチスが戦争中にどんなことをしたのかということを知るには、読んでおいてもよいと思います。写真で見るとひどいですね。人間の骨が山積みだったり、生きてまま刺青をして、その皮をはいてハンドバックをつくって、嬉しそうに写真に写っていたりですね。このフランクフルが、「ノイローゼが治るとは、苦悩する能力が蘇ることである」と。苦悩する、苦しみ悩む。人間は苦悩することによって成長する。苦悩のない人生はないと思います。生きるっていうのは苦しいんです。山登りの好きな人、ハイキングでもいいです、山に登るのは苦しいでしょう。でもてっぺんに立って下りて、また行こうと思うでしょう。苦しいからと、私たちはやらないわけではないんです。スポーツでもそうでしょう。ラグビーとかサッカーでもそうでしょう。実際に運動をした人はわかるでしょう。だいたい五分五分のときは、四分六分くらいでこっちが駄目だと思わしいですね。そこで駄目だと思ったほうが負けるらしいです。そらしんどいですよ。苦しみを超えるところに、面白みがあるんでしょう。八百長で勝っても仕方ないでしょう。相手が悪意の限りにこっちの意図をくじこうとする、それをさらに出し抜いてやる。そのときに、「やった」と思えるわでね。苦勞なしに何かをやったとしても、喜びってないんじゃないですかね。喜びっていうのはそういうものです。楽しみはまた別です。楽しみっていうのは旨いものを食べたりですね。でも張り合いがない。よくやって、失敗したかもしれないのを、何とかやって、それも自分の甲斐性で、もし何かあったらアウトだった、という状況を乗り越える。そういうところに、生きているという実感があるんじゃないですかね。

(2) ブッシュマンの棄老

ブッシュマンというのは、イギリス人が南アフリカのカラハリ砂漠にいる褐色の黒人をそう名づけたんです。

彼らは、カラハリ砂漠でもう何年も住んでいて、いまだに狩猟・採集しかしていない。僕等は生産ということをやりに始めて、文明というものが生まれてきたわけです。生産とは農業と牧畜です。それは、自然に働きかけて、我々が生活するのに便利な状況をつくる。それが文明です。僕らは、「自然に帰る」などと言っているけれど、自然に帰ったら大変ですよ。自然の掟というのは、ジャングルの掟です。ジャングルの掟では、弱いものは死ぬ。我々だけが、強いものが弱いものを助けてみんな仲良くと、極めて不自然なスローガンをつくっている。そして、なんとかそれを具体化しようとしているんだ。どこまで出来ているかは別です。

今だって、いわゆる先進国と発展途上国との対立関係がある。やがて、発展途上国が先進国を追い抜くのじゃないかな。人口的に明らかにそうでしょ。おわかりでしょうが、日本ではこの頃若い女性が子どもを産もうとはしない。だから、良い悪いは別ですが、数十年後には日本の人口は今の半分になるらしい。その頃は、おそらく65歳以上の高齢者の人口が全人口の3分の1を超えているのではないかな。だから大変だよ。君たちが65歳以上になったら。労働人口というのは、15歳から65歳までで、彼らが高齢者を養う。今は高齢者人口が全人口の4分の1に近づいていて、まもなく3分の1になるわけ。そうなると、働いている人の負担が大きくなる。もちろん税金も増えますよね。だから大変なんだ。君たちは若いからまだ分からないだろうし、負担させられる方だから、「老人年金や老人福祉などはやめて」などと言っているけれども、いずれは君たちが65歳になる。君たちが老人に冷たくしていると、君たちが65歳になったときに子ども達は、まあ、子どもがおらんかもしれないけれど大変なことになるよ。

ブッシュマンに戻りますと、狩猟・採集をしながら彼らはカラハリ砂漠でずっと暮らしてきたわけですよ。そこで、彼ら独特の習慣があり、その一つが棄老です。棄老というのは、老人を捨てるといことです。棄老するのは、彼らが狩猟・採集しかしないからです。狩猟というのは狩に行くことです。採集というのは食べられる木の根だとか実だとか、草だとかそういうものがあるでしょ、それを採りに行くことで、かなり広い範囲を移動しているわけです。だから、そんなに大きなグループを作れないんですね。5、6家族、1家族が6、7人だと考えて20人くらいで移動している。時に、年に一回くらい、1グループ20人くらいのグループがいくつか集まって何百人というグループを作ることがあるらしいですけど、そういうことはめったにない。普段は20人くらいで転々

と移動しながら、狩猟したり採集したりしている。この狩猟というのは男達がするんですけどもね。キリンを狩ったり、豚を狩ったりなどするんですけど、めったに獲れないそうです。めったに獲れないので、大体生活は女性が集めてくる草や木の根や実などで生計を立てているらしいです。そのようにして、移動しながら生活をしているものだから、移動できなくなった仲間を連れては移動できないんです。つまり、ここにある食べ物を全部食べ尽したわけだから、次は次の食べ物がある場所に行かなければならない。これが我々の常識からするとずいぶん遠いところに行くわけです。それもかなりのスピードらしいね。だから、老人はついていけなくなる。そこで、ある時老人がもうついていけなくなったら、その老人に3日か4日分の水と食料を与えて、置き去りにするんです。そして、この老人は3日か4日分の水と食料をうまく食い延ばして1週間くらい生きて、それから水不足や飢えで死ぬのかと思っていたら違うんです。何で死ぬと思う？野獣に食われるんだ。だから自然死ではないんだ。群れを作る小型動物や中型動物に食われて死ぬらしい。それがもう何年もカラハリ砂漠で彼らがやってきた生活習慣なんですね。もしも、老人がかわいそうだからといって、その老人の周りにキャンプを張ってずっと滞在していたら、食べ物がないからみんな死んでしまうわけ。『檀山節考』というグランプリをとった日本の映画がありますけれども、あれも同じで「姥捨て」についての映画です。だから棄老というのはわりあい多いんですよ。

あるいは、食老という習慣のある部族もあります。食老というのは老人を食べるといことです。もう役に立たないからせめて食べ物にしてと。しかしそれもね、微妙なんだな。老人を食べることによって、老人と一つになる。つまり、ただ単に食料として、ものとして見るというそういう面だけではなくてね、老人と一つになるわけでしょ。例えば、昔ギリシアでは、ゲルマンでもそういう風習があったのかな、敵にも英雄的存在の人がいるでしょ。その人を戦争で戦って倒したら、その人の心臓を食べればその人と同じ勇気や力が自分のものになるという、ある種宗教的な意味があったんだ。だから人を食べるといことは、ただ単に食事として食べるということではなくて、その人の何かにあやかりたいという意味もあるんです。だから食老の習慣があるからといって、残酷とは必ずしも言えない。老人の知恵、先祖からの魂、そういうものを「食べる」ということによって自分のものにするという面もある。だから、一概になかなか言えないのだけれども、とにかくブッシュマンには棄老とい

う習慣があったんです。それがあから、ブッシュマンはカラハリという雨もあまり降らない、植物もそれほどあるわけでもなく、動物もそれほどおるわけでもない、そういうかなり厳しい状況でずっと生きてきたんですね。我々からみれば、棄老、老人を捨てるということはひどいことです。しかし、現実には日本でも同じかもしれないよ。聞いたわけで、見てきたわけではないけれども、老人施設や老人病棟はかなり悲惨みたいですよ。そういう本を見れば、そこの職員が「私が年を取ってもここだけには入りたくない。」つまり、自分が職員として勤めている老人施設があるでしょ。いずれ年をとって若い人は冷たいから、「自分のことは自分でします」と言ってどこかに入らなければならないわけ。その場合、今私が勤めているここだけには入りたくないという座談会は良く出ていますよ。それは自分が現に勤めている、自分がサービスを提供している、そこでのサービスが全然不足していること、ひどいことを、自らおっしゃっているということですね。実際、ひどいみたい。聞いてみたら。だから、半分棄老しているブッシュマンと同じかもしれないよ。ポーボワールというフランスの作家兼哲学者がいて、この人が『古い』という本を書いている。これもなかなか面白い。ポーボワールはもう亡くなっているけれども、僕からみたら10くらいは上かな、その世代です。戦後のパリに公立の老人施設があるのです。つまり、あまり金持ちではない人が身寄りが亡くなって、引き取られるという施設、ここにもなかなか入りにくいそうなのですが、そこにいた老人たちが、半年で3分の1亡くなるとか。1年に半分かな。ちゃんと覚えていませんが『古い』という上下2冊の本の下巻の最後の方に、パリにおける老人施設の状況についてポーボワールが調べたデータがありますから、少し古いかもしれないけれども読んでみなさい。施設に入った老人は、まるで死にに入るみたいだ。2, 3年で全員死ぬのではないかな。だから、それは老人施設というよりも、老人を殺している施設みたいなものだ。見るのも不愉快な老人はそういう施設に押し込まれて、死ぬのを待たれている、と。現に、早く死ぬことを待たれている老人はたくさんいるじゃないですか。私も自分が老人の域に入って大分になるから、色々思うけれどもね。そういう厳しさがあるから生き残っているんですよ。つまり、老人を捨てるという厳しさがあるから若い人が生きられるんだ。ポーボワールは言っていますね。「死ぬということと、年をとるということは、その時にならなければひとつごととしか思えない人間の特性がある。」これは良いことか、悪いことか。

(3) ニワトリのバーベキュー

これは、鳥山敏子という変わった先生がおられるんです。長野県で「賢治の学校」という学校を開いていまして、カリスマ的な小学校の先生です。この人は東京都の小学校の先生でした。この先生は、毎年、多摩川か何かの川原に生徒を連れて行って、ニワトリを放して逃げるのを追いかけて捕まえて、首を切って、血を抜いて、羽をむしって、バーベキューにして食べるんですよ。これが年中行事なんだ、鳥山敏子先生の。そうすると、女の子の中には、「先生やめて」と目をふさぐのを、「見てなさい」と目を覆っている手をとって、首を切って、血を抜くんですね。これをやるようになるまでには何年もかかったと思いますよ。近くの鳥屋と交渉して、卵を産まなくなった雌鳥をただでもらってきてやるんです。都立の小学校の先生ですから、教育委員会も大分抵抗をしたと思うのですが、それを乗り切るだけの力がある人なんだ。男の子なんかは「こんなもん食うか」と言って、がんばる子も出てくるらしい。ところが、バーベキューの匂いがしてくると、本当にうまそうな匂いがするので、「一口食べたらいいしかった」という作文が載っているんです。

何故彼女がこのようなことをするのか。これは太郎次郎社という出版社の、『命輝く』という本に書いてあることです。鳥山さんについては賛否両論があり、ものすごいカリスマ性があるから信者みたいな人もいますが、批判する人もおられます。何故彼女がこれを始めたかと言いますとね。「カラアゲ大好き」「ビフテキ大好き」「だけど、牛を殺すような人は最低だ。鳥を絞めるような人は人ではない」と言う子どもがおったんです。だから、「あなた達はなんていうことを言うんだ。」と怒って始めたそうです。つまりね、僕らが自分の命を支えるということは、どれだけ多くの命の犠牲で成り立っているのか。チリメンジャコを一口食べてみなさいよ。チリメンジャコ一口の中には300くらいの命がこもっていますよ。もっとも、僕らが食べるときには死んでいますけれどもね。ところが、この頃僕らが飲み屋に行ったらね。白魚の踊り食いなどを食べるじゃないですか。「生きているのを食べるのがうまい」と言いながら食べる人はたくさんいるじゃないですか。だから、僕等が生きているということは多くの命の犠牲で成り立っている、大変なことですよ。

一昨日、『千と千尋の神隠し』をテレビでやっていたので見てたんですよ。そしたら、豚がたくさん出ていて、豚が食べられるという話が出ていたけれどもね。人間はたくさんひどいことをしているじゃないですか。フランス料理にもあるでしょう？ガチョウにウィスキーをたく

さん飲ませてフォアグラを作らせるなど、ひどいよね人間のしていることは。だから、鳥山さんはそれで腹が立ったんだ。我々が、どれだけたくさんの生き物を犠牲にして自分の命をつないでいるのか。それをね、「牛を殺す人は最低だ」とか、「ニワトリの首を絞める人は人ではない」なんて。そりゃ、僕らがレストランに行ったら、きれいに料理されて出てきますよ。本当に食欲をそそるね。しかし、田舎に行ったら、鳥をつぶすということはごちそうだからね。「一回やってみ」と言われたからしてみたけれど、あれは難しいね。出来なかったから、慣れた人にやってもらったけれど。とにかくそういうことだ。

でね、そういうことをして作文を書かせているのだけれど、その作文はやらせかと思うほど良いことを書いているね、子ども達は。例えばね、「あれだけ死ぬのを嫌がった鳥さんを食べたのだから、鳥さんの分まで頑張っ生きてなくっちゃ」と女の子が書いていてね、そういうことがたくさん書いてあって、「ほんまかいな？」と思うのだけれど、そういうことがたくさんあるんだね。鳥山さんが、そのようなバーベキュー大会をしなければならなかった気持ちは良く分かる。結局、この行事には、PTAのお母さんがたくさん参加されているそうですよ。だから、そういう風に親御さんの支持を取り付けている。だから、教育委員会も特例として認めたんでしょう。その本を読んだらびっくりしたんだけれども、豚の解体もやるんだね。豚一匹を置いてね。もちろん死んだ豚でしょうけど、それを解体して、これがロースとか、これが何々とか言いながら授業をやっているそうですよ。ものすごい人ですね。

僕らはついきれいごとで「命を大切に」だとか、「自然をきれいに」などとか、「動物愛護」とか言っているでしょ。動物愛護とかは難しいなあ。そうではないかな？この間、スコットランドの議会で狐打ちを禁止することを法律で可決するかしないかがやっと決まったんかな。つまり、世界で、捕鯨反対の先頭にたっているイギリスですけど、イギリス人は狐打ちが大好きなんだ。それが残酷だから、狐打ちを止めようという法案を提案しようということが時々言われるけれど、提案もされない。提案してもほとんど否決ですよ。アメリカで、銃器を自由に買えないようにしようという法案がつぶされるのと同じだね。狐打ちは特別だなどということがあらしい。だから、捕鯨反対の急先鋒の国が、狐打ちを禁止する法案さえ議会で通らないという現実があるんです。だから、みんな勝手なものだ。難しい。そういうことです。

(4) ある養護学校の先生

これは、いままでのとはちょっと違うのだけれども、ある養護学校の50歳くらいの女性の先生に聞いた話です。

ある時にね、「まいった」という話です。養護学校を知っていますか。肢体不自由や発達障害だとかいう子どもさん達を集めている学校です。養護学級というものはみなさん知っているでしょう。ほとんどの学校の中にある、障害、ほとんどが発達障害の子どもですけれども、そういう子ども達5、6人でやっている学級です。これは小学校・中学校にはあるからみんな知っているかもしれないけれど。養護学校というのは、そういう障害の大きい子ども達が通うところで、小学部、中学部、高等部があります。そういう学校のことで、この先生は肢体不自由の養護学校の中学部の先生だったんです。この先生が、ある時に、「同じ人間だもんね」ということを何かの折りに一人の男子生徒に言った。すると、その生徒が「先生、同じ人間だというけれども、僕がこの障害を背負ってどれだけ辛い思いをしているのかを分かって言っているのか。僕はこれまでもこの障害でずいぶん辛い思いをしてきたけれども、これからもこの障害を持ってずっと生きていくんだ。それを承知の上で、先生は、先生と僕が同じ人間と言っているのか。」と言った。それで一言も言えなかったそうです。

だから、僕らはその辺を相当シビアに考える必要がある。「人間みな兄弟」とか言いたい。さっきも言ったように、「一人はみんなの為に、みんなは一人の為に」とか言いたい。ところが現実にはみな差があるんです。そういう差を見据える、お互いの差を。例えば、かなりのハンディキャップを背負って生まれてくる子どもはたくさんおるわけだ。そういうハンディキャップを背負ってきた人たちと、ハンディキャップを背負っていない人たちが、同じ人間だというためには、そういう差を見据えた上で、見据えた上でなおかつ同じ人間だと言えるかどうかという吟味がいる。その差というものに目をつむって、みんな同じだと言うことは、本当に絵空事です。この先生は、「同じ人間なんだ、あなたはそういうハンディキャップを背負っているけれども同じ人間として頑張りましょうね」ということを善意で言ったんだ。それがどういう文脈でどうだったのかは分からないけれど、その中学生にしてみたらちょっとカチンと来るところがあったんだろうか。そこで、自分のハンディのことを言った。「これは今までもそうだったし、これからはずっと自分が背負っていくのだ。そういう自分と先生を同じだと言えるのか。そういうことを分かった上で、同じ人間と言った

のか。」と言われて、本当に参った。つまり、自分の安易さ、表層的ヒューマニズムに気づかされたわけです。ハンディのない人は、ハンディのある人の辛さが分かっていない。

例えば、あなた方は修士課程の学生らしい。だからインテリだ。インテリなんだけれども、これは一種の特権身分ですよ。現実にはね、就職問題などを考えたら、修士課程にいるからといって別にどうってことはない。やはりつらいことはある。だから、これを特権身分だなんて馬鹿にするな、なんて思うかもしれないけれど。だけど、そういう特権に恵まれない人がたくさんいるということをつらなければならぬ。そしてまた、自分がそういう特権的身分であるがゆえに、どれだけ有利であるかということをつらなければならぬ。「全部それは自分の力だ。自分は頑張って、合格してきているのだ。アルバイトして学費も稼いでいる。」と言うかもしれない。しかし、それはアルバイトをして学費を稼ぎ、試験に合格するだけの能力があるからです。ということは、遺伝ですよ。親がたまたま頭が良かったか、健康だったか。だから、努力するに耐えるだけの体力や知力にも恵まれているんだ。それをちょっとばかり利用させてもらって、現在のこういう状況におる。それがいかにありがたいか。そのありがたさを分かっていないといけぬ。

つい、「学歴があっても仕方ないよ。」と言いたくなるけれど、その学歴でずいぶん得しています。だから、自分がいかに得しているかということをつらなければならぬ。そういう特権に恵まれない人の悔しさが分かる。「学校さえ出ていたら自分は、私は」と思っている人はいっぱいいるんです。もっとも彼らは、学校を出ていないから大学や大学院を理想化している。大学院にさえ行けば、エスカレーター式に良い格好が出来るなんて思っているところがある。実際に大学院にいる人といない人とは、そういう認識にかなりズレがあるけれども、一般論からしてみたら、あなた方は大学院におるから、大学院を出た人にだけ許された選択肢がある。まあ、大学院にさえ行けばあとは寝ていたって研究職があって、などという甘いものではないけれども、やはり選択肢としては大学院にだけ開かれている状況がある。その状況に、能力もあるしやる気もあるしという人たちが、パスポートがないためだけにそこからはみ出ている。はみ出ているために、ずいぶん辛い思いをしているということがあるわけですよ。だから、どれだけ自分が恵まれているかということをつらなければならぬ。そして、自分が恵まれているということに気がついている人だけが、恵まれている人の悔しさが分かる。

私は、ここの臨床の学生たちも先生たちもそうですけれども、やはりカウンセリングをやっていますから、そういういわば恵まれないと言ってよい人たちとたくさん会っています。そういう人たちの話を聞いているとね、ただ単に平凡であることがいかにありがたいかということが、ある程度分かるとはなかなか言えないけれども、もしこういう仕事をしていなければ分からなかった程度には分かると思えると思う。僕自身のことを言うのは、何かもしれないけれど、例えとしては丁度良いと思いますから話します。

僕は40歳の始めごろに失明の危険がありまして、まいったことがある。大したことはなかったのだけれど。その時にね、「片目でも良いから見えて欲しい」と思いましたね。本を読めなくても良い、立ち居振る舞いがそこそこ出来る程度には視力が残ってくれば良いと。それまでは見えるなんていうことは当たり前でしょ？だから失明なんていうことは考えていなかった。だから、極端に言えば、その時は絶望的だったですね。でも、普通じゃなくても良い。片方だけ見えたなら良い。本が読めなくてもまあ良いと。とにかく立ち居振る舞いが何とか出来たら良いと思った。確かに見えるということは平凡なことだが、それが失われるということ、その可能性が少しでも見えたときは参ったな。それで悶々としていたけれども、「一応大丈夫」、お医者さんが言うには「死ぬまで持つ」と言われて、安心しましたけれどもね。安心したら途端に、見えるということがいかにありがたいかということをつら忘れてしまって、あれが不足している、これが不足しているという、元の俗物に戻ってしまったけれどもね。

やっぱり、そういう喪失の危険、自分が当たり前であると思っているそういうものが、実はありがたいということは時々考えたら良いのではないかね。そう思うね。だから、つい僕らはその辺のことが分からなくなってね、自分が享受している特権、比較的少数の恵まれた人だけが享受している特権、院生であるということは、この頃は「みんな大学に行って」なんていうことも言われているけれど、やっぱりそこそこの大学の院生身分というのは、大したこともないと言え言えるんだけれども、やっぱり大したことなんだ。そのありがたみを考えなければいけないだろうな。そういうことが分かっていて、初めてそれのない人の本当の悔しさ、それがいない人はものすごく悔しがっていますよ、それが分かるんだ。だから、ましてや障害のある人は、福祉の人はここにたくさんおるだろうし、障害のある人に接触することが多いと思うけれど、やはりそういう人たちと、自分たちとの差を考

えなければならぬ。そして、その差がありながら、その差を踏まえた上での同じ人間。差に目を覆って、同じ人間なんて言っても、ハンディのある人達からすればそんなものはほんとに虚しいえせヒューマニズム。だから、そういうハンディを背負っている人がどれだけ辛い思いをしているのかを分かってほしい。そういうことは実際には出来ませんから、自分がどれだけ恵まれているのかということに気がつくしかしょうがない。私はたまたま失明の危険ということがあって、今まで当たり前だと思っていたことがなくなるという可能性がちょっとあって、それにはもう本当に参った。視力がほんの少しでも残ってくれたら何にも言わないという気持ちになりましたね、その時は。まあ、そういうことです。

3. 人間はみな兄弟か

(1) 花嫁の父 一仲の良さについて—

これはね、今まで言ってきたことと同じようなことなんだけれども。仲が良いということはどういうことか分かりますよね？それがどういうことかと言葉にしろと言われたら困るけれどもね。その人と一緒におったら気持ちが安らぐとか、しゃべりたい時にはしゃべるけれども、いつまで黙っていても構わないとか、いつまでも一緒にいたいとか、元気が出るとか、そういう関係だ。それが仲の良い関係ですね。だから、そういう点で、僕らは仲の良さについては分かっているんだ。分かっているけれどもね、実は仲が良いということは、すべて何らかの社会的役割を通してでしか具体化しないという面があるんです。社会的役割というのは、社会の中で決められた役割ですから不自然なものなのです。仲が良い、あの人と一緒にいたい、一緒にいたらずいぶん気持ちがくつろぐ、元気が出る、というのは自然な動きと考えると良いですね。ところが、自然なそういう心の動きというものが、社会的役割という人工の、従って文化が違えば、時代とか地域が違えばやはり同じ自然な気持ちでも表れ方が違って来る。そういうことに時々気がつかないことがある。その結果、誰に対しても同じように接するようになると言いたくなるんです。そうではないんですね、仲の良さというのは、仲の良さそのものについて僕らは分かっています。分かっているけれども、例えば、「あそこの親子はまるで夫婦のように仲が良い」などと聞くと「あれ？」と思うでしょ。いったいどのような親子なんだと。つまり、仲の良い夫婦の仲の良さは、夫婦ならではの仲の良さなんです。仲が良いということは、僕らには分かっている。共通していますよ。親子であろうと、友達であろうと、他人であろうと、クラブ仲間であろうと、仲の良

いということでは分かっています。そこは共通しているんです。それは分かっているけれども、仲の良い夫婦の仲の良さは、夫婦ならではの仲の良さなんです。それから、仲の良い親子の仲の良さは、親子だからこそその仲の良さなんです。これが一緒になったらえらいことです。だから、僕らは「あれ？」と思う。それはね、仲が良いということは誰に対してもあるけれど、社会的役割を通してその表れ方が違っていているということです。

さっき、一番最初に「ゴッドファーザー」の話をしました。仲間に対しては仁義が厚い。家族に対しては非常に温かくて優しい。ところが、相手のギャング集団に対しては、酷薄無情、情け容赦がない。これは相手が違うからです。僕らはこのことを考えなければならぬ。僕は、誰に対しても同じようにやらなければならないと思いたいが、できません。この人に対しては優しい気持ちが沸々と湧いてくるけれども、この人にはそんな気持ちは全く湧いてこない。恋人の飲み残したビールなら喜んで飲むし、恋人の食べ残したすき焼きの後なら喜んで食べるけれども、あいつの残したすき焼きは触っただけでサブイボがでるとかね。そういうことがあるわけです。

仲が良いということは、誰に対しても同じようにしないといけないと思いがちですが、それはできっこないんです。誰に対してもまるで夫婦のように仲良くしましようというのはおかしいでしょ。友達に友達です。そこに見分けというものがあります。ようするに、この人は友達だから友達程度の仲の良さに止めなければならぬとか、夫婦だから夫婦らしく仲良くしなければならぬとは、僕らは思わないでしょ。思わないけれど、自然にパッと出ているんです。自然に出てくるのだけれども、意識することなしにちゃんと使い分けしていることを考えなければならぬ。

「花嫁の父」というのは、昔このような映画があったので出したわけです。つまり、父親は娘に対して、母親は息子に対して特殊な感情を持つ。フロイトや精神分析家達はこういうことを言っている。現実には、やはり、私は父親で娘も息子もいましたけれども、今はどちらもおじさん、おばさんですけども、やはり娘の方がはるかに可愛かったですね。フロイトとユングの言っていることが正しいとすれば、彼らは誰しにも近親姦願望があると言っている。つまり、異性の息子、娘に対して、あるいは異性の父親母親に対して、お互いに近親姦願望がある、と。そして人間的成長とは、そういう近親姦願望をいかに克服するかということにかかっている。だから、近親姦願望が、正しいか正しくないかは別ですけども、自然な気持ちであるとすれば、それをいかに親は親らし

く、つまり親としての役割を通して具体化しなければならない。だから、花嫁の父というのは、娘が結婚するときになんとも言えない気持ちになるわけです。私にもありましたね。家内は喜んだったけれどね。だけどね、そういう娘に僕が性的に接近すれば、これはえらいことになるわけです。だから、それはコントロールする。娘が成熟した娘、つまりメスとして成熟してくるのを見るのは、こんなことを言うてはいけないのだろうけれど、楽しかったね。まさに『花咲ける乙女たち』という小説があるけれども、一日一日魅力的になっていくね。その様子を見るのは楽しかった。息子にはそんな風に思ったことはないけれど。そういうことがある。あるフランスの作家が、父親に娘としての魅力を感じてもらえなかった娘は、いつまでも女性としての自信を持ってないと言っているんですね。これはきれいな言い方をしているのだけれども、娘としての魅力というのはメスとしての魅力ということです。だから、父親が娘に娘としての魅力を感じるということは、荒っぽい言い方をすれば、娘に対して欲情するということです。それをそのまま、普通の恋人や夫婦であるかのように具体化すると、これは大変なことになる。それをいかに父親役割を通して具体化するかというところに、花嫁の父のなんとも言えない微妙なところがあるということです。

僕等はずいぶん自然な心の動きというものがあれば、その自然な心の動きをそのまま出すことが純粋であると思いたがっているけれど、そうではありません。それを社会的役割を通して具体化することをやらなければならない。だから、どっちが悪いのか、つまりそういう近親姦願望があるのかどうかは分からないが、かりにあるとして、そういうものがあるからその願望を満たそうとすることが純粋なのとは言えないのです。我々は、文化という不自然な状況を自分達でつくってきたわけだから、そういう不自然な文化的状況の下では、不自然であるということが自然である。これは逆説です。自然の衝動をいかにコントロールして許された形で具体化するか。例えば、「あいつなんか死んだらいい」と思うことがありますでしょ。もしも完全犯罪が可能であったら、あいつを殺してやりたい。しかしどうもやばい。だから、殺してやりたいとは思いますが、まあ我慢して意地悪するくらいで止めとくとか思うことがありますでしょ。そういうことです。だから、純粋な気持ちだからやっても良いとは言えないし、それをやらないのはむしろ不純であると言うのもおかしい。僕等はやはり文化現象、つまり役割関係を、人間関係というのは全部役割ですからね、その役割を規定されているわけです。文化によってはそれは異なる

ってくるけれども。例えば、イスラム圏であれば、今でも一夫多妻でしょ。4人までなら妻を持っても良いという現実がある。それを今のような発想から言えば、「そういう野蛮な風習は即刻止めなければいけない」と言うことになるかもしれません。だから難しいんです。文化の異なる、武力を持った勢力が、自分より武力のない人達に自分たちの風習を押し付けるということは大変なことですよ。例えば、コロンブス以降の、アメリカのインディオに対するヨーロッパ人のやり方は無茶苦茶ですよ。あるいは、アフリカ人に対するヨーロッパ人のやり方なんか。まず、宣教師が入っている。キリスト教です。その現地には色々な宗教があるわけです。そういう野蛮な宗教を捨てさせて、そして恵み深き神の子にするという名のもとでひどいことをやっていますね。

言いたいことは、本来的なものが僕等にはあるわけです。例えば、排泄衝動がある。皆あるでしょ？皆ありますけれども、それに正直に従って、「ちょっとごめんね」と言ってここでやったら、皆顔をしかめるでしょ。だから、そういう自然なものを我慢して、トイレという所へ行って、人知れずすますということが文化で、不自然なことです。だけれども、こういう不自然な在りようを通して、自然なものをいかに具体化するのか、それがおそらく人間というものです。自然だから、当然感じているのだから、すぐにそれを満たすということが本来自然なことであって、それをコントロールしてそ知らぬ顔をしているという事が不自然であるとは言えないのです。あらゆる面でそれがありますよ。僕等の自然な感情、自然な心の動きは大事ですよ。これをちゃんと満たしていかなければ僕等は生物としては生きていけない。けれど、それをやたらにやっちはいけないのです。だから今の日本という国のある種の規範というか、したきりというかやり方があるんです。それに基づいてやる。それは不自然です。不自然だから純粋ではないとは言えない。不自然であるからこそ純粋なのです。

しかし、僕等はしばしばそういう自然な心と不自然な社会的役割という制約にはさまれて、それに引き裂かれて死ぬほどの思いをすることがあります。義理と人情の板ばさみとか。さっきも言った、主観的な自分のあり方と、客観的な認識と、その辺で引き裂かれる場合がある。しかし、「こんな旨いビールこれまでに飲んだことがない」ということは、別に引き裂かれてはいないでしょうが。たぶんね。そういうことで引き裂かれるようなことはたくさんありますよ。けれど、そういう二つのものがあって、二つのものを二つながら自分のものとして、そしてそこで自分としてどうするか、たぶんそれが主体性

です。主体的に生きる、自分らしく生きるということとはそういうことです。だから、それをどっちかに割り切っている時は、おそらく自分の全体性というものが失われている。その全体性の喪失が、例えばノイローゼ。つまり、全体的な心と体のバランスが崩れているのだということが言えるのではないかと思いますね。

(2) 親の役割、教師の役割

僕等は相手によって気持ちの動き方が違うということをやったのだけれども、そしてそういう気持ちの動きの違う人達と関わりあうことで、子どもはそれなりに成長していくということを言いたい。そこで、教師と親は役割が違うということを言いたいのですね。

親の役割が何かと言えば、わが子をかけがえがないと思うことです。つまり親というものは、良い面もあれば悪い面もあるけれども、常にうちの子さえ良かったら他の子なんてどうでも良いと思っているのです。それは大変な家族エゴイズムです。しかし、何でそう思うのかと言えば、親にとって子どもはかけがえがないからです。かけがえがないとはどういうことかと言うとね、自分のかけがえのなさ、自分は自分でないと実現できないユニークな意味を持って生まれてきているらしい、と思う実感です。この自分でないと実現できないユニークな意味というのは、例えば我々のように、肌の色が黄色いという人間は、肌の色が黄色いということを通して自分の存在の意味を具体化する。だからこれを、肌の色さえ白ければ、なんてことを思ったのでは、私たちは自分の独自のユニークな意味を実現することができない。

私は、最近、マイケル・ジャクソンを見て人間とは思えなかったですね。なんというのか、人格破綻者と言うのか、なんとも言えなかったね。彼は黒人でしょ。黒人が白くなりたかったんだね。そして、お金をたくさん儲けたものだから、金に糸目をつけないで無茶苦茶やったでしょ。その結果、あれだね。無残ですねえ。だから、やはり皮膚が黒ければ、黒いということを通して自分の存在の意味を確かめる。それを無理に変えようとするればあなるのか、と思いました。これは僕の個人的な印象ですけれどもね。おのれのかけがえのない現実を通して私でないと実現できない自分の意味を確かめる。例えば、背が低い人は背が低いということを通して、自分の意味を具体化する。背が高い人は背が高いということを通して、自分の意味を実現するんです。そういうことなんですね。だから、親が、他の人はどうなってもあなたさえ良かったらいいと言うのは、そう意味で、つまり、あなたは私にとってかけがえがないという意味です。そ

して、あなたの友達は残念ながらかけがえがある。あなたはかけがえがない。あなたがあなたであるというその事が、私達にとっては、あなたがかけがえがないための唯一の条件である。こういう、他人によってかけがえのない人間として扱われた人だけが、自分のかけがえのなさを実感できる。だから、ある意味これは非常にエゴイスティックな面があるわけですね。だから裏目に出ると良くないですけども、こういう親の特別扱い、かけがえのない存在として扱われるという経験がないということは、子どもにとってはものすごく不幸なことだと思うのです。

それから、先生の役割を言っておきますと、先生の役割は公平扱いです。平等扱いです。つまり、あなた達は一人ひとりかけがえのない存在なのだけれども、一人の私がこれから40人の君達と付き合っていくとなれば、私がすることはみんな同じ、みな同じ人間なのだという平等扱いであり、公平扱いである、ということをしなければいけない。これはどういうことかと言いますと、親の特別扱いを受けて子ども達は自分のかけがえのなさを実感できる。それから、先生の平等扱いを受けて、お互いがかけがえのない存在にもかかわらず、人間としてはみんな同じなんだということを実感できる、ということです。つまり、自分は特別、ユニークな存在である。自分でないと実現できないユニークな意味を持って生まれてきている。そういう実感と、それからやはり人間は一人ひとり同じ人間なんだ。私もユニーク、あの人もユニークなんだけれども、そのユニークさというものがどう現れるのかということ、人によって違うのだけれども、人間としては一緒なんだという、一見異なる原理が、子どもという一人のまとまった存在の中でうまく収まる。だから、親は特別扱いをしないとイケないのです。そして先生は平等扱いをしなければいけない。したがって、先生のような親はかないませんね。あるいは、親のような先生も先生としては失格でしょう。そういうことなのです。

子どもが十全の子どもとして成長していくには、特別扱いをしてくれる親と、平等扱い、ある意味ではその他大勢扱いをしてくれる先生という、違った役割を担った大人に違った扱いをされることを通して、自分の中にみんな違うけれども皆同じ、つまり一見矛盾している、相反しているような、そういう原則を自分の中にまとめたものとして収めるということが、親と教師のいわば共同作業と言うのかな。違った役割を持った人のそういう係わり合いがあって、初めて子どもは子どもなりにうまく成長できる。それをなんでもかんでも、ある種の人間

関係が唯一の正しい人間関係であって、親であろうと先生であろうと同僚であろうと、みんな同じように関わらなければならないというのは、僕は間違いだと思う。そのようなことを言いたくて今日お伺いしたわけです。

【質問】

Q：含蓄の深い御講義ありがとうございました。最初の方に出てきた、ポトマックの墜落事故のところで、ジレンマを連想したんですけど、先生も臨床家としてクライアントに関わっておられて、例えば危機状態になって自殺したいという人が電話をかけてきたとして、その時に、自分の私生活ですごく大事なことがあったとしますね。その時に、クライアントのことを思えば自分の私生活を犠牲にしても献身的なことをし続けるということと、もしそれをやり続けたら私生活がめちゃくちゃなことになってしまうというジレンマに陥ってしまった時に、どういう選択をするのか。答えはないと言われましたが、やはり、一度は巻き込まれてぼろぼろになるという経験を経て、先生はそのような割とニュートラルなどちらでもあるのかなという思いになられたのか、そういう巻き込まれ体験なしに、頭で、逆転移というものは危険だからほどほどにということがあり得るのか。やはり、なんらかの巻き込まれてという体験をすることは必要なことなのでしょうか。

A：まあ、その通りです。そういうどっちともとれないところで決意をせんといかんです。どちらかを選ばないといけない。それともう一つは、自分の大切なものがわからない人間に、他人の大切さは分から

ない。だから、状況によるけれども、どうなのだろうな。カウンセラーの中には、「自殺したい」と言う人をあえて止めないという人もおりますね。それともう一つは、「あなたのことはすごく大事かもしれないけれども、今僕はこういう状況だから今はちょっと相談に乗れない」ということを言えるか、言えないか。ということは、「僕にとっては、あなたの相談に乗ることよりも、家族との生活を維持していくことの方がずっと大切なんだ。だから、僕がそういうサービスをするのは、決まった場所、決まった時間に限られている。だけど、今の様な状態であなたがピンチなことは分かっているけれども、こういう理由で、この2時間か3時間はプライベートなことをするんだ。だから、それから後であれば出来る」ということだけです。それに対して、相手はどう思うか、どうするかは、もう関係ない。だから、その辺を本当に正直に言わないといけない。つまり、「先生にとってはどっちが大事なのか、僕が大事なのか、家族が大事なのか」と聞かれたときに、「それは家族だ」と言うことです。「じゃあ、いままで僕のことを一生懸命してくれていたのは嘘か。」「いや、私は今でもあなたのことには一生懸命だ。だけど、今は家族の方が大切だ。」と、状況をどういうかは別として、「私はいまこういう状況にいる。だからあなたのために時間をとることは出来ない。」ということをおびれずに言うこと。だから、そういう意味では、その都度その都度が勝負です。

生活科学論ゼミナール 2004年12月13日(月)10時～12時